

さるしま junior

第5号（春—その5）

令和3年5月21日発行

園長 小菅 哲也

T君の軽やかなスキップを見て思う…



気持ちのいい風が吹き抜ける日の午後、お母さんと手をつないで、軽やかにスキップをしながら幼稚園から出てくるT君に出会いました。「T君、スキップが上手だね」と声をかけると、T君の笑顔のかたわらで「いつの間にかできるようになったんですよ」というお母さんのはずんだ声が聞こえてきました。

「自分の思ったとおりに体を動かせること」を「運動神経がよい」という言い方をします。個人によって差はありますが、運動神経がもっとも発達するのは、3, 4歳ごろから9, 10歳ごろにかけてだと言われています。この時期に、たくさん走ったり、思いきりジャンプしたり、逆さまになる経験をしたり、壁をよじ登ったり、音楽に乗って体を動かしたり、バランスを取ったり、縄やボールなどを扱ったり…といった全身を思いきり使う遊びを体験しておくことは、これからの健康な生活やさまざまな運動を行っていくうえでの大切な土台となります。



ゴールは同じでも、ゴールまでの道はさまざまです



昨年の運動会で、一人ひとりが見事なパフォーマンスを披露したソーラン節。はじめの頃の練習では、こんな姿が見られました。教員や友達の動きをじっと見ている子、自分にできそうな動きだけを行ってそれ以外は観察に回る子、できなくても見よう見まねでやってみようとする子…。どれも子どもたちが真

剣に学ぼうとしている姿です。五感をフルに働かせながら、「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤しながら、動きを懸命に覚えようとしているのです。

動きやステップを覚えるのに、いちばん手っ取り早いのは、教え込んでしまうことでしょうか。それは時に子どもたちにとって、大きな苦痛や負担となります。たとえゴールは同じでも、そこへ



いたるまでの道はさまざまです。大切なのは、「子どもの思いや願いをしっかりと受けとめること」「その子に合ったペースで行うこと」「上達したところをどんどんほめること」。こうして身につけた技や力には、必ず「自信」や「楽しさ」が伴います。「ソーラン節って面白い!」「〇〇の曲でもやってみたい!」という「楽しさ体験」の積み重ねが、将来の大きなエネルギーとなって行くのです。



冒頭のT君は、体を動かす楽しさや心地よさを味わいながらスキップを覚えたのでしよう。その笑顔がそのことを何よりも物語っていました。

親も教師も日々考え続ける、共感と毅然の“さじ加減”



子どもとの「共感」を大切にしながら技や力を身につけていくのが「遊び」なのに対して、その対極にあるのが「躰（しつけ）」です。「躰（しつけ）」では、自分自身の生命を守るため、周りのみんなが安心して生活するために、「毅然」とした指導が求められます。

先日、諏訪幼稚園では園外保育に備えて、「歩道の歩き方」「横断歩道の渡り方」について、全教職員による熱のこもった指導が行われました。それまでは、登降園時、よそ見や勝手な行動などの心配な姿が時々見られましたが、その日を境に、子どもたちの歩道の歩き方が見違えるようになりました。



また、「地震・津波を想定した防災訓練」に向けて、防災頭巾のかぶり方の指導や階段の上り下りが繰り返し行われています。着替えも簡単ではない園児にとって、防災頭巾をかぶるのはひと苦勞です。蒸し暑い時期に、階段上りを行うことは、決して楽しいことではないでしょう。でも、「自分の命を自分で守れる子どもに育てる」ためには欠かせないことです。

せないことです。

「遊び」と「躰（しつけ）」を例に挙げて説明してきましたが、「遊び」の中でも「躰（しつけ）」が必要な場面があります。「躰（しつけ）」だからと、子どもの心に寄り添うことなしに強引な関わり方に終始すると、子どもの心は荒んでしまうでしょう。

まさしく子育てや教育の両輪とも言うべき「共感」と「毅然」。子どもを目の前にして、親も教師も、その“さじ加減”について、悩み続け、振り返り続ける毎日です。

